

江戸六組飛脚屋仲間について

藤村潤一郎

一 貞享—元文期

江戸六組飛脚屋仲間については、既に児玉幸多氏が「通日雇人足」⁽¹⁾として詳細な研究を行なっており、日本通運株式会社「社史」⁽²⁾も宇野脩平氏の執筆によりふれている。本稿は此等先学の業績により教示をうけた事を銘記しておく。貞享四年藤田理兵衛作「江戸鹿子」⁽³⁾巻六には問屋大概に京大坂飛脚宿の一部として「新橋南町一丁目上下宿 角兵衛、同所 与左衛門」とあり、巻五には諸職諸商人有所に上下飛脚宿として「新橋南町一丁目式丁め、糺町、日本橋南町丁目新道、石町三丁め、駿河町」とある。元禄三年三月上旬藤田理兵衛作「増補江戸惣鹿子名所大全」⁽⁴⁾はこれと内容である。

元禄五年板「諸国買物調方記」⁽⁵⁾と同七年「日本国花万葉種」⁽⁶⁾では上下宿を含くめて前者は「飛脚宿^{京大坂}」、後者は「上下飛脚宿」としているから、上下宿即ち江戸六組飛脚屋仲間の一部には、上下飛脚宿即ち定飛脚問屋に近い性格の者もいたのであろう。

さて正徳二年三月には

江戸六組飛脚屋仲間について（藤村）

一往来之面々其家来并未々雇之通人足、近年ハ主人之權威を以、道中ニて非分之仕方等有之、或は下々可持道具をも人足ニ持セ、其ものハ馬駕籠ニ乗、或ハ賃錢をも不払もの共有之由相聞候、向後ハ右之類之不屈無之様ニ、雇人足ハ不及申、其請負之もの迄急度申付、可召連候、自今以後、不法之族も於有之は、道中宿々にて改之、家来并雇之ものたり共、其所に留置、早速道中奉行え相訴候様に申渡候間、其旨を可被存候

一往来之面々家来并雇之者に至るまで、駄賃旅籠錢等無相違様払候様に急度可被申付候、旅籠錢等或は不相応に減し候て相渡し、或は無相違請取候由証文仕らせ、相払はさる輩も有之由相聞候、向後右之通之儀共於有之は、是又早速道中奉行え可申訴之由、宿々え申渡候之間、可有其心得事、⁽⁶⁾

として仰出された。これは「宿々ハ不及申、助郷村々迄も及困窮候由相訴候付」⁽⁷⁾き番頭役所主人に對して触出されたものである。

また正徳二年三月には

一道中往還之面々雇人足共、惣して近年不埒之仕方多く、就中御用にて往来又は在番之面々より雇之節ハ、主人之權威を以弥不埒いたし、或ハ猥に手替りの人足を取り、其人足の方より錢を出させ候て指ゆるし、或ハ自分持候道具等入足ニ持せ、其者ハ駕籠ニ乗り、賃錢を相払はず、又は宿々のものニ對し非分之儀共申懸、若宿々のもの申旨有之候得ハ、種々之あたをなし候由委細相聞へ、不屈之至候、向後ハ江戸、京、大坂にて雇人足請負之ものに申渡し、人足請負候度々人足共に急度申付、右之通の不屈仕らず、無換子細有之、手替りの人足取之、又ハ馬駕籠等に乘候節は、御定之賃錢無相違払之、旅籠錢等之儀これに同じく、少も非分之儀仕らせ間敷候、道中宿々えも若不屈之族於有之ハ、誰之雇之ものたりとも、其所に押置、道中奉行え早速可訴之旨申渡候間、詮儀之上、当人は不及申、請負人迄可為曲事、

として、「其所々奉行所并支配々より請負人共急度可被申付者也」とある。⁽⁸⁾そして大略同文の触が東海道、中仙道、日光海道、奥州、甲州海道への条目にみえている。⁽⁹⁾

ここに海道での横暴を問題にされている雇人足、雇之通人足が本稿の対象とする者であり、江戸、京、大坂に人足を支配する請負人がいる事が知られる。

これは新井白石の駅制改革の際の触であるが、その間の事情について新井白石「折たく柴の記」⁽¹⁰⁾中には、「奉行の人々、道中上下のものども不法の事は、いかにとも、制すべきやうあらずと申せし事を議せしは、これはこゝにも京大坂にも、上下のものと申て、東西往来の人の、道のほどやとひ召ぐすものなり」とし、ついで彼等の不法の事実を記し、これに對して「宿々のものどもいかにともいふ事なし、もとより、それらの事なせしものも、いかなるものともしるべからざれば、奉行もまた其沙汰に及びがたき由なり」と従来の対応を述べ、ついで白石の制止策を

こゝにも京大坂にも、かれらが事をとりはからふものあり、これを日傭のもの、宿とも、上下のもの、宿とも申す也、かれらやとふべきとおもふ人は、その宿のものどもの許にいひつかはしぬれば、やがてかれらをさしつかはしぬ、さればかれらも其宿のもの、心にたかひぬれば、たち所に世わたるわざをもうしなひ、妻子養ふべき事もかなはざれば、これをおそれうやまふ事主人に相同じ、かれらもし不法の事あらむには、其宿たらむもの其罪に行はるべき所の法嚴ならんには、その弊はあらたまりぬべしと申したりき。

と記す。即ち上下宿を通じて人足を制止しようとするものであり、法の実施後には「はたしてこれらの事はやみぬ」と自讃している。上下宿の実態を或る程度記している点に興味がある。

次に白石と同時代の室鳩巢「兼山秘策」⁽¹¹⁾第一冊には、正徳三年二月一日の物価騰貴の子細五ヶ条の内に、

日傭の類多く成候事、日傭の者にも其類あまた相わかれ有之候歟、御普請方の日傭の者、大名火消のやとはれ

候薦の者、又道中上下の者の類、年々に多く成候は不及申、近年武家方不勝手に成来候ては、然るべき大身の人にも、足輕以下の者日雇に仕られ候も有之、まして小身の衆中は、常に人を抱置候事難叶、歩士、若党以下雇者ども、供にも召連、使にも遣候事に成候に付て、町人にも是等の請負仕候者出来、辺土の町々には、此等の輩猶々多く、爰かしこの辻番所にも、五人七人宛寄宿仕候はぬ所も無之候と承候

とあり当時日雇が増加している事と道中上下の者、即ち通日雇人足は一般の日雇と同性格に受取られている。又享保九年自序田中邸隅「民間省要」中編卷之⁽¹²⁾には南国よりの貴人御下向の際の或る駅御泊所の願書として、「縦ば主人慎み給ふとも、下々の若党中間、其外上下雇の者に至迄、心中皆奢り誇りて来る事なれば、是をふせぐに叶ひがたし」とあり、道中での弊害は残っている。

さて元文二年正月「上下宿仲間極之儀願人之事」⁽¹³⁾によると、上下日用屋は上下人足共が他商売の者の方に入込まない様にするために仲間仰付けを願ひ、町年寄はこの件についての御尋に對して、上下宿は從來「相極り候組合と申儀」もないが差障は起らなかつた。国々所々往來の上下人足の宿としては、上下日用屋に多くの人足が来るが、その他に「親類由身之もの方」に逗留する者もある。つまり脇宿に行く訳である。そこで願ひ通りにすると町方も迷惑するだろうし、人足は脇宿出来なくなり、賃錢申合が行なわれると武家方でも差障りがあるから、從來通りがよいと申上げている。許可にならなかつたと考えられるが、これは人足確保から仲間仰付けを企てたのであり、当時の江戸での上人足の動きを示している。なお以下通日雇人足については、史料にみえる通りに記るし、特に用語を統一しない。

二 延享元年東海道宿々御触流

「六組飛脚屋旧記」⁽¹⁴⁾、正確には「天正八寅年^{マツ}と延享元子年迄 六組飛脚屋旧記 日本橋組 式冊之内」と「天明七

末年より寛政二戌年迄 六組飛脚屋旧記 日本橋組 式冊之内」である。前者は内容からすれば明和五年の成立であるから、両者同時に作製されたものではない。両者共に日本橋組となっているが、内容からすれば前者は日本橋組、後者は京橋南組で作製されたものと推測される。そして両者に日本橋組でこの「六組飛脚屋旧記」の表題を付けたのではあるまいか。推測の域を出るものでないから詳細は今後にまきたい。

なお前者は上下飛脚屋の起源についての記述のみが天正一八年で、実際の内容は延享元年である。

さて起源については天正一八年から「銘々御状箱を首ニ懸け京大坂江往来ス」とあり、御入国以来次第に商売が繁昌して「上下之旅人飛脚荷物負相勤」めたとしている。三度飛脚は元禄七年八月に大坂石町の大坂屋久次郎が専駄負つてきたのが最初だとしている。前記貞享四年「江戸鹿子」には三度飛脚は京大坂飛脚宿としてみえているから正しくないが、六組飛脚屋がそう考えていた事が知られる。

さて延享元年の東海道の宿々えの触流等について史料紹介をする。

延享元年二月上旬から、「六組日用頭割取并才領等重荷物ニ至迄」道中に出る事が難かしかった。それは品川から小田原迄に小揚取⁽¹⁵⁾、悪党がいて、ねだり取押えおとしなどして通行させない。道中だけでなく宿々に迄きて、大勢で金三―五両か錢二―五貫文の借用を申出る。若し貸さない場合には、一応夜更けに帰えるが翌日人家を離れた野合や山中で待伏て御長持を引据えて旅行させない。又重立った宰領日用頭が来ると御荷物に大勢取付いて旅行させない。「此方は纔二五人欺七人」であるから結局金二―三両渡す事になるのが普通である。

訴訟の直接の背景となったのは日本橋組米屋久右衛門が寛保三年夏に丹州田辺牧野因幡守様御供で登った際の事である。なお当時江戸上下飛脚屋は日本橋、京橋、芝口、本芝、赤坂、神田の六組からなっており、神田組は神田本郷組とも称したようである。日本橋組米屋は余程後から駕籠で簾を落して通行したが、品川の観音前から悪党が悪口雑

言し勘忍し難い程であり、川崎からは更に増加し、神奈川からも同様であつた。戸塚では宿に五〇人余が押入つたが、宿の主人権兵衛が、踏込めば番太を呼ぶと言つたので踏込まず、鳥目惣貫文を挨拶料にとの主人の申出で渡したが、悪党共が庭に投げつけたので面子を潰された主人が再び番太を呼ぶと言ひ、悪党が詫を入れて拾集めて歸つた。その夜には帳場に大勢土足で踏込み、帳元と仲間の見送り人が門屋役人、番太を呼んで事をすませた。翌朝出立に際して役人と下働が保障したので藤沢から馬入川を越える迄老人も現われない。小田原では帳場に大勢見舞と称して来たが、間屋役人に差替を頼んであるから何なら呼ぶと強い態度をとつたので、錢惣貫五百文ですみ、箱根迄老人も出現しない。一体に山東は悪者が多く、米屋久右衛門でこの調子だから宰領杯は行く者がいないのは「至極」とみている。

結局四貫六百文が使用された。長持拾貫目も四人掛りで錢三、四百文位の所が、六貫五百文から七貫文かかる。それやこれやで上下飛脚屋に請負人は潰れ兼ねない。その上に入御屋敷に対しては請負の競争が激しい。悪い了簡の者もいて長持請持の頭分の者に対しては氣の毒だと挨拶し、影に廻つて道中の小揚取、悪党の尻押をする者もいる。

この様な事情を打開する為に、日本橋組米屋久右衛門宅に六組の者が会合して訴訟の相談をした。そこで神田組仙台屋徳太夫を願人にとの動機が出た。そして六組から願書下書を認め来る三月四日に築地寒サ橋三河屋平八方に、各組料理代金一分持参、人数一組五人限りと決つた。三月四日には合計二八名が集まり、各組願書の内から神田組のものを採用し、これを元にして神田組仙台屋徳太夫が次の通りに認めた。即ち延享元年三月八日付で

一 江戸中上下飛脚屋六組之者申上候、東海道五拾三駅小揚取悪党共徒党仕、人家離れ野合山中二大勢待伏仕御荷物并才領懷中腰巻候錢有丈押取仕、追落シ同前二御座候、御泊二而は、大勢大帳場并才領共下宿をさがし五人拾人も参、錢貸候様ニ申懸ケ、若貸不申候得は、翌日旅途中大勢徒党待伏仕、御長持等通不申、其上毎日毎夜大帳場江土足ニ而踏込、礫をなけ込、燈火を消シ、帳場を取散乱妨仕候ニ付、每晚油断相成不申、迷惑至極仕候、

御関西者左程ニハ無御座候、山東江悪者集り、右之趣ニ御座候、此分ニ而は商売相止候も外ニ致方無之、渡世不仕候而は必至と困窮仕候、外ニ家業仕方も不奉存候故、無是非御訴訟奉申候、被聴 召訳以 御慈悲品川駅
も小田原駅迄御触流被成下候様奉願上候、御尋之義ハ乍恐口上を以可申上候、以上

即ち前述の事情を記るして品川から小田原迄の駅に触流を願っている。願人は米屋など各組三人計一八人であり、願先は御奉行所様、即ち町奉行（北御番所）能勢肥後守、御勘定奉行道中御掛り御加役（飯田町坂上右角）神谷志摩守、大目付道中御掛御加役（小石川雉子橋）水野対馬守である。

これに就いて、願人は御尋に際して返答が其度に異なつては困るので、神田組仙台屋徳太夫を願人頭取とし公訴の際の発言は彼一人に限る。徳太夫には年金拾両を遣し、六組走廻り者として京橋組柴田屋関右衛門と組屋号不明の甚右衛門が当り、兩人には年金五両宛を遣す。若し手錠牢舎の場合には家内を扶持し「店貨諸事」差支ない様にする。

費用は京橋組駿河屋十五郎に一組金五両宛を預け、それで不足の際には駿河屋が取替えるが、大金の場合には日本橋組大津屋喜兵衛に内談の上で一同に計る。御番所に出た際には弁当は組切とし、敷物代払は六組走廻り者兩人が勤める。三月八日の願書差出は日本橋組が当る事になった。

三月八日に「道中五拾三駅悪者徒党ねたり候押取之御願」として提出されたが、同日は町奉行能勢肥後守が勘定奉行神谷志摩守に申遣し、追つて呼出す旨の仰で済んだ。

同一日夜差紙到来、一二日罷出ると昨一日に触流があつたから、勘定奉行神谷志摩守の所に行かなくてよいと仰渡された。

終つて御腰掛で日本橋組米屋が次の点について、一四日に自宅で密談したいと述べた。即ち (一)五拾三駅間屋から悪党共を鎮める仕方、(二)諸大名の発駕の刻の仕方、(三)六組内不取締で互に鎬を削る点の向後の仕方、(四)一組金五両宛

出金であるが、今後出費が増加したら返弁をどうするか、(五)長持賃高直の致方、(六)割取長持陸尺奴子等迄割家譜と申事、以上の六件について各組五人程出席して思召を持参されたいとの事である。

三月一四日の会では、京橋組田村屋半兵衛が半切拾枚程の書付を出したが問題にならず、次で六組走廻り者兩人が意見を出すと、「不依何事相談かましき事無用、兩人は金銭取集メ請取払六組江馳廻り申義斗役目可致」と問題にされず、その他にも意見があったが、最後に仙台屋徳太夫がこれに当り障りがあれば今後は出席しないと述べて書付を差出して、これが採用された。五拾三次願状を取る方便妙策とあるが、具体的な事は不明である。次に出銀については五分を三分に引下げ、通馬六分、其外の里数割付は、二拾里から六拾里迄は半減、六拾里以上は三分宛、式拾里以下は出銀なし、通馬一疋は六分宛、其外は人数に準ずる。そして取集は組行事が取揃え、日本橋組大津屋喜兵衛・京橋組駿河屋重五郎之預け証文を取って置く、出銀しない者については、他組行事と六組走廻り者兩人が立会で請取る。他国の仁、又は京大坂の衆中が請負った場合には宿立会で請取る。つぎに六組の内御屋敷が遠方にあり帳場を最寄にした際には、帳面立の所の行事に渡し、請負人組合行事は請取ってはならない。

その他の件については不明である。なお五拾三次願之状五三通と五拾三次印形取一通は、立会の上で認めたものに仙台屋徳太夫が手を入れて認めたものに決り、二葉町大黒屋平四郎二階で若衆一〇人斗りが認めたが、印形の際の本紙は仙台屋徳太夫が認めた。その際に本芝組出雲屋弥太夫、本芝組讃岐屋嘉兵衛、日本橋組米屋久右衛門が相談して、行事が軽るいとして、六組日用頭一二五人の行事に一三人がなった。

五拾三次駅には飛脚屋の者で桑名甚六という者を遣す筈であったが、大坂の大和屋市左衛門が差留めたので日本橋組越前屋八兵衛方の旅人伝兵衛を往来賃銀五両渡し切で遣す事にし、四月八日に京橋組田村屋宅で上書を認め、同二〇日に出された。この願状には日本橋組二一、京橋組二二、赤坂組一五、神田組二六、芝口組二四、本芝組一五、合

計一二五人の名前があつて、宿問屋役人に対して今後不埒の貨錢を払つたり等の事があれば、払不足の額を書写して通知すれば、行事が調査して弁ずる事を約束している。

前記三月十一日付御触流の結果として、御下りの御大名が全部到着した処では、山東は左程ではないが、風祭、湯本、川端、箱根山中、塚原、三嶋明神前、千貫樋まで、悪党風呂敷組が屯して問題を起す。日用頭は金錢を出さざるを得ず、登りの通日用を請負つても宰領などは致方がなく、京大坂伏見の同商売宰領でもこの噂斗りで、対策が必要となつた。

四月一二日に二葉町大黒屋平四郎方に集まって評議したが、議論が区々に分かれたが、仙台屋徳太夫が公訴を主張し、これに従つて下書作製し衆中の賛成をえて、翌四月一三日に「御当地上下飛脚屋共奉申上候道中筋悪者相止マツ二不申前々も募り申候ニ付御願」として御奉行所に差出した。これは三月十一日に品川から小田原迄御触流により、その間にいた悪党が箱根山中である風祭から三島千貫樋迄の八里の間に移動したから、三島駅迄の御触流を願つたものである。願人は日本橋組三、京橋組二、芝口組三、本芝組二、赤坂組三、神田組三の合計一六人である。

御白洲では仙台屋徳太夫が発言し、小揚取悪党の者は大方は無宿で住所不定と答えた。町奉行は御勘定道中奉行加役神谷志摩守方に遺すから訴状は請取る旨を仰渡した。

同二〇日夜差紙到来、翌二一日に願人一六人と六組からの見舞人三、四〇人が町奉行能勢肥後守番所に赴いた。御白洲では願人に対して昨二〇日に三島駅迄の御触流の旨を申聞された。この後で日を更めて御札に参上している。

これで解決した筈であつたが、御大名が御暇になつて出立する頃になると、品川の観音前に悪党が出る噂があり、日本橋組米屋宅に各組五、六人宛を招いて、対策として御発駕の大名に送りの者式人割付ける事にし、圖取で順番を定めたいと切出して皆が賛成したが、仙台屋徳太夫が大名一頭に二人宛では一日に三、四頭も御発駕の場合には送り

の者が不足する。この役は悪党に取巻かれても逃げずに打倒され、小髻に疵を附けられて、これを問屋などに申立て悪党を宿に預けるのだから、上下の者や別簾の者ではないかと説明し、参加者を求めたが誰もない。

それで又議論になり、小田原迄の路銭は軽々しい事ではないから金貳両宛としたが参加者がなく、仙台屋徳太夫が行く事になった。

路銀については京橋組駿河屋十五郎が三分金を取集める迄は、赤坂組出雲屋弥太夫が取替をする。しかし六組走廻り者兩人の申し次第には渡さない。本芝、赤坂、本郷は手遠にあるから、日本橋組の米屋久右衛門、若狭屋忠右衛門、大津屋嘉兵衛は印形で通にして金子を渡す事にする。それで取集めた金は大津屋から赤坂組出雲屋に渡されたいと発言して決まった。

さて仙台屋徳太夫が品川観音前に駕籠でいると、やってきた長持三棹に悪者貳拾人許りが上下の者を取巻いたが、備中屋作兵衛が送り目附がきて捕え次第問屋に願う事になったと昨夜大坂の相模屋市兵衛から人を遣わして知らせてきたから、長持荷物に構うなど言ったので悪党は散じた。仙台屋は備中屋を捕えて、備中屋と相模屋は「時々行事罷越預ヶ申候歟」いずれ御番所に呼出して六組と対決せよと言渡した。この兩人の性格は明らかにし得ない。川崎では悪党二人が長持の持人から錢一貫四百文をねだった所を捕えて都合を申聞せた。浅間下で悪党二人が長持にとやかく云ったが、仙台屋が現れると逃げた。保土ヶ谷宿では立場から大勢出たが小揚取は雇わない。吉田の立場では大勢の悪党が御長持三棹の浅間下から戸塚迄の小揚取賃を要求し、御屋敷宰領は逃げだし歩行荷物も錢を遣い切つて据込み、悪党の一人は土足で御長持の上に揚り荷持を寄せつけない。御宰領は御咎を恐れて仙台屋に其方は請負人であるから御長持を上げろと云う。具足の絵符継印が同家御家中の駕籠がきたので、その武家に仙台屋が委細を告げ、追散らした。戸塚には悪党が来ず、翌日からはこれ迄の御宰領三人に代り若い足軽が宰領した。日用頭忠七は仙台屋を御本陣

に呼んで礼を述べた。翌日も悪党は出現せず、小田原、湯本迄見送って仙台屋は江戸に帰った。成果があった訳である。

五月四日に問題の大坂相模屋市兵衛が日本橋組堺屋小右衛門方にいた所え、赤坂、神田、本芝から七、八人が赴き「市兵衛預ケ則預り証文取置」、同六日栗橋屋清八方で六組寄合をして下書を認め、同八日に「江戸上下飛脚屋六組之者共申上候道中筋小揚取悪党共狼藉追而相募り申候御願」を願人一六人から御奉行所に差出した。

それは品川宿から戸塚宿迄の小揚取悪党の狼藉を述べ、彼等の名前は別紙に記るしたから、其宿々に仰付けて罷出ない様に成されたい。宿役人御伝馬人足は、目下御帰府で多忙であり、呼出せば御当地逗留で物入と差支がある。御大名の御供で六組が通行する際には、宿役人とは願ひ願はずにの間柄であるから、罷出なくてよい様に願っている。

別紙切紙には悪党の徒党の者として品川宿六、川崎宿四、神奈川宿一、保土ヶ谷宿五、戸塚宿一、藤沢宿三、合計二〇人¹⁶、この他に名前¹⁶の知れない者が多数いるとしている。

前述の通り、送り目付仙台屋の場合を例として記るしたが、彼以外に九人が路銀金二両を請取って行った。その他に三人が手前路銀で一八度行き、金三六両の内金九両一分を請取ったが残金が出ない。この残金二六両三分のため仙台屋は申し来ても参らず、五拾三次得心印形壱通をその扣として預かった形になった。

その後六組寄合で日本橋組越前屋八兵衛が五拾三次得心印形帳壱通と願状の江戸中日用頭名前と時々¹⁶の行事拾三人の印形の据っている扣壱通とを、仙台屋許りでなく各組一年宛で預かる事を主張し、賛成者もあつたが仙台屋が式通を渡すから越前屋が御訴訟の当役として御白洲で演舌する事と、残金を渡す事を申出たので、越前屋の立場がなくなつた。仙台屋は従来通りに預かるが、二六両二分のかたとして、金子次第引渡すと言つて終つた一幕がある。

ついで五月八日に御白洲に出ると、場合によつては勘定奉行神谷志摩守方に遣す事もあると仰付けられた。

腰掛に出ると伏見南都町津の国屋太郎兵衛、大坂鳴屋町奈良屋善六、生瀬の十兵衛が蒸籠老荷を持参して備中屋、

相模屋について頼にきたのを、六組の見舞の者が取散した。芝口組播磨屋権兵衛が内に入って一同に披露し、三人と六組とで訴訟の預り戻しが論ぜられた。三人が詫を入れ、神田組の政田屋嘉兵衛、万屋半四郎、政田屋武兵衛の貰て事を済ませ、三人が相模屋、備中屋に申聞せる事とし、以後不埒があれば三人に内々で知らせる事で、この兩人の件は落着した。そして五月一日夜差紙が到来し、翌一二日町奉行能勢肥後守番所に罷出ると、道中奉行加役兩人から品川宿から三島宿迄申触たから志摩守の所に参るに及ばない旨を仰られた。これで目的は完全に達した訳である。

その結果六月中は静謐であり悪党も出ず、盆前になり互に取込みで少々の事があつても聞捨にしておいたが、日本橋組伊勢屋九郎右衛門から急廻状があり、同宅に行事と外に六〇人余が参会した。

事は六月二八日に豊前小倉の小笠原伊予守御発駕で、数年の出入である日本橋組伊勢屋九郎左衛門が通人馬一式を請負い、名代として八兵衛、嘉七の兩人が登った。道中で石部から伏見迄の四宿で悪党が多く元締、宰領、通人足に至る迄妨害され酒手をせびられる。特に梅木村立場で甚しく、帰途では大津か草津の土になると思え宿内で踏殺して紙位牌を江戸六組に三度便で送つてやると威かされ、大坂に逗留したまゝである旨の四日半早便の書状がきたからである。会で公訴に決まり願書は仙台屋が認め、願人は月行事一六人とし、印形は御腰懸にする事にした。

七月一九日に「草津大津伏見三宿之悪者徒党仕頭取四人赤坂より下申候節打殺可申堅ク約諸仕候ニ付、兩人大坂ニ逗留仕候、御慈悲を以無恙罷帰り申度願」を御奉行所に差出した。内容は事件の概略を記るし、品川宿から伏見宿迄の御触流と、草津大津伏見へ帰路兩人が妨害されない様に問屋に仰付を願つたものであるが、悪党の頭取の名前は別紙切紙でなく本文中に記るしている。この点は後述する様に大きな問題になった。

七月二七日に町奉行御番所に届けて、勘定奉行神谷志摩守御中之口に参上を仰付けられ、飯田町の志摩守御白洲御差合につき小川町松浦河内守御白洲を借りて公事訴訟を御聞との事でそちらに伺った。先ず飛札を提出し、証拠とし

て保管を命ぜられた。ついで四人の悪党を呼下し、糺明の上で咎めると神谷志摩守が述べた。仙台屋がその際に宿々本陣問屋を下らせては物入で時間もかゝるから避けたいと答えると、大目付水野対馬守が本紙に悪党の名前を記してあるから、呼下さなくては「評定所并三奉行決断所之法」に背く事になると問題にした。松浦河内守の執なしで願書を下げられ、四人の名前を切紙に書いて明日差出を命ぜられた。御門前で翌日の下書を認めている内に、町奉行能勢肥後守御番所へ、見舞にきていた芝口組若狭屋惣兵衛、本芝組万屋源兵衛を赴かせ事情を説明させたが、釈明出来ず、仙台屋が行つて了承を得たが、与力弥次右衛門は意趣返しに下書を取上げ、翌朝一字も相異なる様に願書を認めて差出す事を命じた。そこで仙台屋が胸の内の扣で書き、翌二八日に差出して相異がなく無事済んだ。それから神谷志摩守と水野対馬守に訴状を差上げた。

この間の事情については日本橋組米屋が「組合未熟之上参候人も不相勤」として、「河内守様御白洲ニおゐて申そこない有之歟、又ハ申違茂候ハ、則手錠、扱々うしろニ而ひや／＼と存知あせを流シ居申候、憐愍旁以河内守様容許、夫ノ已歟上番所ニ而不願、惣兵衛源兵衛謂違、是又一々申披、今日之御届ケ」と労をねぎらうと共に困難な交渉を記している。そして当事者の伊勢屋の態度が問題にされ、伊勢屋が米屋に詫を入れた。

八月三日夜に差紙が到来し、日本橋組伊勢屋から各組行事に廻状が廻された。翌四日六組行事が揃った所で日本橋組米屋が、去る七月二八日には各組二人宛出席と約束したのに守られず、特に芝口、赤坂、本芝組が一人も出席しなかつた理由を糺すと、日本橋組伊勢屋には割取御幕下の衆が多いから手が足りると考えたと答え、仙台屋は過ぎた事として不問にふした。

能勢肥後守の御白洲では、松浦河内守御役所が七月二七日の願書認直し悪党を切紙に認めた事を感じ、願の通に「品川駅より伏見駅迄触流シ并草津津伏見右之宿問屋江八兵衛嘉七旅行之節、四人之悪者其外悪者等妨不致候様哉

敷道中御奉行より申遣候、此之趣大坂江申遣シ、八兵衛嘉七罷歸り候様、若四人之外ニ違乱申者有之候ハ、早速訴可出候、若隠置外より露顯いたし候ハ、可咎もの也」となつて落着した。

これで品川から伏見迄触流された訳であるが、六組一同と云うより、米屋、仙台屋が事件を捕えて巧みに実現した感がある。この時期には六組自体の結合も最初はまだ強いものではなかったのではあるまいか。

なお延享四卯年三月に、前記正徳二年の触が再び触出されたが、⁽¹⁸⁾通日雇については延享元年の六組の行動も伏線として作用したのではあるまいか。

三 宝暦一〇年五海道御触流

宝暦八寅年三月には矢張り正徳二年の触が繰返されて⁽¹⁸⁾いる。法令が出たからといって事態が一変する訳はないから、余り海道に変化はなかったのだらう。

宝暦一〇辰年四月に京大坂伏見の同商売の惣代として下ってきた加賀屋甚右衛門は、東海道等での悪者小揚取の横行について訴訟する事につき、同二六日仙台屋徳太夫に江戸の日用頭衆——六組の意向を質ねた。両者話合の結果訴訟費用は京大坂伏見と江戸が折半する事に落着いたから、同二八日六組寄合が開かれた。

そこでは願書下書を仙台屋が認める事、つぎに願人は大行事仙台屋と日本橋組越前屋八兵衛になる。従つて越前屋も大行事である。さらに費用が多額になる場合には上方にその旨を連絡する事とし、願は江戸が当り加賀屋甚右衛門は入れない事とした。なお仙台屋は西久保平八方に居たが、大行事が居所がなくては願書が認められず、芝口柴井町三右衛門店に移り費用は割符なる事になった。

四月二九日付「江戸上下飛脚屋六組之者共申上候東海道小揚取悪党共ねたり取押取同前ニ乱妨仕候相鎮候様御触流

之被下度御願」が御奉行所に差出された。内容は品川宿から伏見宿迄御触流を願ったものである。町奉行依田和泉守から宝暦八、九年分のねだり取られた金額の書上げを命ぜられた。五月八日に差上げたが、具体的な金額は明らかでない。同一〇、二〇日と御伺に出たが、六月九日に町奉行は取込の内に数度出頭したのは不屈として、願人一六人、即ち各組行事、大行事を家主五人組に御預けを命じ、その御差紙順達が遅くれて、翌一〇日に懸りの内与力戸張甚右衛門⁽¹⁹⁾町与力松浦安右衛門が一六人の預け証文を取り、その場で延享元年能勢肥後守時分の御触流の扣の提出を求めた。六組には保存されておらず、元禄五申年生れで六九才の仙台屋が一部始終を詳細に語り、その功により一六人の印形を仙台屋の申上を認めたものに捺印して、罷帰る事が出来た⁽²⁰⁾。

同二二日に六組行事一六人が道中奉行小幡山城守番所に出頭すると、宝暦八寅年に東海道五拾三次宿から六組が不法の件を訴訟があり、各組二人宛呼下しての尋問でも答が符合したから、その事の申開きが出来なければ訴状は取上げず、町奉行の糺明申越も不吟味を申遣す旨を申渡された。

六組はこの様な事実を知らない旨を答え、仙台屋が諸国御役人中や遠国奉行が旅行に際して六組に申付けず、御屋敷出入の他の商売の者に申付ける事実があり、彼等は「一生之請負初メ重而請負仕候義無之、依而やつ子陸尺荷物等ニ至迄申候義ハ用ひ不申我尽を働き法外不屈繁多」である。六組では奴子預陸尺頭から証文に印形をさせて召仕うし、以前不埒のあった者は雇傭しない。江戸のみでなく京大坂伏見の者にも伝えて雇わない。延享元年五拾三次得心印形の扣があつて、不埒の者があれば宿から申出る事を規定しているが申出はない旨を答えた。

更に道中奉行小幡山城守が御留役江坂孫三郎に仰付けて、六組以外の法外不埒者を放置したのは不埒の様に思うとの申渡には、仙台屋が江戸六組は往古からあるが御免になつていない内々の組合であるから「詮義相成不申」と答えている。そして組合申合請では、御役人中、御奉行を請負った際には証文を取り、更に「道中筋御休泊間イ之宿次」の

問屋役人、本陣からも印形を取る。不埒があつた際に請負人から弁償する様に、「請負人跡先キ本陣問屋より宿并ニ印形取通行仕候」として、同二三日に、(一)五拾三次得心印形壹冊、(二)同願狀拾三人印形付壹冊、(三)讃岐屋嘉兵衛・山家屋林助請負仕候節取置仕候証文、(四)万屋平八右同断、(五)万屋源兵衛右同断の五品を提出した。最後の証文の内容は「繼人足決而取申間敷若自然雇之者不達者仕候歟又ハ頓病相煩候ハ、問屋役人江相願御定之賃錢を相払請取御権威ニ而不法不仕候」とある。六月二六日には道中奉行小幡山城守御白洲で六組一六人が、願人の木曾路中仙道美濃路惣代柏原宿本陣難波辰右衛門、東海道五拾三次惣代島田宿本陣置輪藤四郎と対決した。

難波辰右衛門が仙台屋は旅行をしないので道中の実状を知らないと申立たのに対して、仙台屋は六組が請負つた場合には小田原、沼津辺迄見送り遣し、それから先もよく承知している。延享元年五拾三次得心印形があるのに宿から申出がなかつた事が証拠で、印形に紛はないから組外の者の仕業と申立て落着した。同二八日証拠五品の写持参を命ぜられた。

七月二九日に道中奉行小幡山城守御白洲で同日付五海道に御触流を告げられ、証拠五品を返却された。同日付上下飛脚屋六組年番行事の受証文⁽²⁾によると、東海道、中仙道、甲州道中、奥州・日光道中共に不埒があり東海道が記して箱訴したもので、「飛脚屋之外、通人足受負之者、凡三百人余も在之由御座候得者、若右之内不埒有之哉」と申上げている。

さて御触流之写は次の通りである。

一東海道小揚取之内、悪党共徒党致シ、上下飛脚屋之者共より賃錢をかすめ取狼藉之由ニ付、右体之者有之候ハハ、其所ニ而召捕可申出旨延享三寅年東海道宿々江申触置候処、又候近來五海道共小揚取無宿之悪党共有之、往来之者より金錢を取、喧嘩を仕懸、旅籠屋江土足ニ而踏込、礫を打、焼火を消、帳面等を引破り、抱錢杯を

取散シ、或は野合山中ニ大勢待伏致シ、荷物突当及狼藉ニ候旨相聞江、在体之者共有之ハ、其所江召捕早々可申出、若見逃シ致シ候段於露顯は、吃可咎条、右之趣、宿々可相心得もの也

宝曆十辰年七月 東海道五十三次佐

谷牧方共

筑後 御印

中仙道木曾路

甲州海道

山城 御印

日光海道

奥 海道

右宿々江

なおこの写は京大坂伏見に送られ、三カ所共に願出て、京都は宝曆一一巳年四月に山城国中に全く同様の御触流があつた。大坂については不明である。

宝曆一〇辰年八月に六組に「定法寛」が御留役江坂孫四郎の仰渡により作製された。それは今回の御触流を期として、古来からの六組定法書の写を各組に渡し、違反する者は組合を除き、京大坂伏見の同商売の者にも張紙して「商売御構可被成候」とある。古来の定法は不明であるが、前後の文言からみて道中筋問屋場での不法を止める項が入っていたらうと推測される。

四 寛政元年仲間仰付と五海道御触流

天明七年二月二日に大坂天満小島町豊島屋清蔵請負の松平隠岐守御家中水野吉右衛門の下りを大坂上町丹後屋

徳右衛門が勤めた。品川観音前で悪党から金三分を、品川八ッ山で腰物を取られ打擲の上で金二分、大木戸で金三〇両の求めに対して金一両をねだり取られた事実がある。

丹後屋徳右衛門は市ヶ谷淨留理坂大目附道中奉行大矢遠江守に駈込訴訟をし御屋敷に留置かれた。翌二二日彼の江戸番宿筑波町京橋組大坂屋長治郎に引渡され、猿樂町勘定奉行道中懸り拓植長門守に勝手次第に訴える様に仰付けられた。二、三日後拓植長門守の所では、丹後屋が大坂住宅の者であるから大坂御奉行の御添鑑がなくては吟味できないが江戸当宿が馬喰町の内にあれば添鑑がなくても取上げると仰聞された。「請負人惣右衛門并徳右衛門」が馬喰町幸手屋治郎兵衛を願って達って訴訟を試みようとしたので見舞の者と江戸番宿京橋組大坂屋長次郎組合の者に連帰えられた。これにより同二四日京橋南組が寄合ひ商売難義であるから御触流を願う旨を相談した。さらに同二四日に三十間堀の茶屋で京橋南組は寄合つて六組惣代として同組五、日本橋組一、合計六人を願人とする事とし、廻状で一同の得心を得た。入用も割合次第出金する事になった。その一札は大芝組三、芝口組五、京橋組八、日本橋組四、神田組五、山之手組二、合計二七名が印形した願人六人宛である。山之手組は延享元年の赤坂組の後身と考えられ、京橋組は内部で京橋組、京橋南組に分かれていたのであろう。

同二八日に町奉行山村信濃守南御番所に訴訟し、延享二年、宝暦一〇年御触流と同趣旨を東海道、木曾路共に御触流を願出た。天明八年二月一七日に町年寄樽屋与左衛門から先年の御触流扣がないので委細取調差出を求められ、同一九日に宝暦一〇年願書写を差出した。同二〇日御触流写を求められ翌二一日に延享二年分は焼失しているので宝暦一〇年分を提出した。同二四日願書扣と御触流写を町奉行に樽屋は提出した。

その頃三十間堀の茶屋に六組の一六人と願人六人が寄合つて入用金について、各組金三両宛出金、山ノ手組は少人数のため金二両出金とし、京橋組南行事若狭屋惣兵衛、丹後屋市兵衛が出金取集に当る。今後何程懸つても六組で

賄う旨が決められた。

三月一日に山村信濃守御番所に御伺に罷出た。一〇月二六日京橋組大坂屋長治郎、播磨屋伊兵衛、若狭屋喜三郎代から山村信濃守に延享年中訴状認の年数が相違しているのは「両御奉行様之由承り伝へ相認メ候」ためであると申上げた。

天明九年正月一六日に山村信濃守御白洲で願人に対して、願の趣は勘定奉行根岸肥前守方に懸合つておいたから勝手次第罷出る事を仰渡された。

同一九日に京橋南組が寄合い相談の上で、翌二〇日駿河台根岸肥前守御役所に願書を差上げ、二五日に出頭を命ぜられた。同二二日根岸肥前守御役所から通日雇が道中で不法の旨を道中間屋から訴出ているので、組合取締り仕法書と江戸惣日用頭共所名前書を差出すべき旨を仰渡された。懸り御留役は大原四郎右衛門で牛込山伏町に屋敷がある。同夜願人等九人寄合の結果、同二四日に六組寄合があり山ノ手組三、大芝組六、芝口組三、日本橋組二、神田組四、京橋組一二、合計三〇人が出席して取締り仕法書と惣名前を認めた。又六組行事三三人から願人に宛た一札が取られた。内容は書出した名前以外の者はいない事と、家業取極書を承知した事、入用金を立合勘定の上で必らず出金する事の三点である。同二九日に根岸肥前守に願書、仕様書、名前書を提出した。

願書は御触流を願上げ、惣人数は一九四人であり、「外商壳体之者御役懸り御武家様通日雇御請負申上候節」の不法は知らないが、六組については仕様書の通り巖敷組合を取締り道中間屋と得と懸合う様にするとしている。

組合仲間名前は日本橋組一二、神田組四四、山之手組二二、大芝組四二、芝口組二〇、京橋組五二、合計一九二人で前記一九四人に足らない。

仕様書は、(一)組合人数を糺し月行事、年行事を定めて道中間屋と合体で家業をする。(二)諸家様、御家中様旅行請負

の場合には、請負人から下ヶ札を持参させて差出す。但し「御家中様方小人数はなれ物」を請負った場合に道中筋で急病人か病死者が出た時は其所の村役人が世話をし最寄の宿から下ヶ札名前の方え知せ、入用金は請負人が負担する。(三)目印下ヶ札のために上下飛脚屋の名前を宿々問屋に差遣わす。(四)道中筋の山宿立場茶屋で通日雇の者が「がさつ」な振舞がない様にする。あつた時は召連て訴える。(五)諸家様通行の際に請負人上下飛脚屋に懸合つて組合の内から我人宛差添つて行き、宿々問屋で不法の通日雇の者を吟味し、若しあれば其所に預けて訴え、賃金とねだり取の金銭は上下飛脚屋が返す。

右の通りであるが、従来は諸家、御家中方往来上下通日雇請負で差出御雇小人数の場合には別段の世話を差立てず、その日雇の内で世話をさせ賃金以外に世話分を別段に差遣していた。近來は道中事情不良で余分の世話役金が必要で家業体が手薄になるので、前記の通り道中筋触流を願ひ、同時に組合御定を願っている。

組合については「京都大坂伏見其外国々より同商売之者共多数御座候、外商売之者新規加入人通日用御請負仕候得ハ私方より差障候義決而無御座候」とある。即ち組合江戸の上下飛脚屋以外の者の請負を禁止するものではない。

さらに組合御定になつても請負値段が高値にならない旨を二月三日(同日寛政と改元)に御留役大原四郎右衛門に、同一六日町年寄奈良屋役所に提出しているが、それは、(一)京都大坂伏見其外の諸国に同業者が大勢いるので、御武家方、町方で通日雇を仰付の際は入札等で請負うから高値にならず、素人が請負つても仲間で差障りはない。(二)仲間御定になつても従来出入の通日雇入口の者を勝手に取替る際に差支えはない。従来入口の者以外に仰付けても差障りはない。(三)仲間一九四人以外に通日雇請負つてきた者もいるが、外商売の素人が請負つても仲間では差障りはない。以上の点をあげ高値か差障りがあれば仲間一同が御咎をうける。従つて仲間は仲間外の営業を排除するものでない事が知られる。

又二月一六日に南北小口年番から奈良屋に對して道中通し日雇請負の者の仲間組合を仰付けける事に対する町中差障りについて、この道中筋通日雇を多く用るのは武家方であり、町人方は商売筋によつては雇うが先ず廻船使用の方が多し。町人往来に際して上下日雇を召連る事は「人数聊之事」である。仲間をきめても「外ニ商売人共道中通し日雇請負候歟、又ハ仲間之手付キ人足相雇候共、仲間之者共差構不申候上は」町方で差障りはない旨を申上げている。⁽²²⁾

さて二月二二日に御白洲で六組は願書を口書に認直し願人印形を仰付けられ、同二四日には行事得心印形を仰付けられた。それから道中筋日雇仲間取極相願候一件吟味として道中奉行の大目付桑原伊予守・勘定奉行根岸肥前守から老中松平越中守に申上げられ、三月五日に伺の通に仰渡された。別紙の「五海道宿々江触書案」も同日相触る可き旨を仰渡された。⁽²³⁾それに基いて四月三日根岸肥前守御白洲で願の通り御触流と、仲間一九四人相定が仰付けられた。道中筋通日雇仲間取極については前記願出の外に旅籠銭は食札引替にし、仲間内で渡世を止めるか休む場合には御届をする。又讓渡新規加入にも願出て差図をうける事を規定している。⁽²⁴⁾

御触流は次の通りである。⁽²⁵⁾

追而此触書相廻シ、留より宿送りを以、肥後守之御役所江可相返候、尤銘々承知之上請書相添可差出候以上一道中筋小揚取之内悪党共申合、旅人江対貸錢等をねたり取、或者及狼籍候由ニ付、前ニ茂右体之者ハ其所ニ而召捕可出旨、触被置候処、又々近年五海道共小揚取無宿休之者立交り、通日雇之者共より金錢をねたり取候趣相聞候、甚敷至候而は、喧嘩等を仕懸、旅籠屋江土足ニ而踏込、磔を打、火を消シ、帳面等を引破、或ハ野合山中ニ大勢待伏をいたし、荷物ニ突当り及狼籍、通日雇之者共より申立候間、前々触書之趣相守、右体之者ハ其所ニ而召捕可申出、若此上ニ致見逼候段於露顯は、宿役人共不念候条、急度可仕候

一通日雇請負之者共宿方江対シ不法之者共^マ有之候相聞候間、此度吟味之上、別紙名前之者江通日雇之仲間申附、

銘々町所名前を記候鑑札、右之者共より宿々江差遣度、日用ニは下ヶ札為致候筈、武家方其外往来之面々上下雇之者、諸事宿方江対シ不埒之義無之立場茶屋等迄加さつ不為致、旅籠錢も食札を渡置引替ニいたし万一金錢等ねたり候日用之者有之候ハ、宿方より断次第、其請負人より相弁訴出候筈申渡候間、其旨相心得右雇之者共若被雇候主人之權威ヲ以、かさつケ間敷義歟又は金錢ねたり取、旅籠錢其外等不相払者茂有之候ハ、名前承札シ、其請負之者共江も申達シ、宿送りを以道中御奉行江も相届、且右雇之者病人有之候節ハ、其宿方江懸合候筈ニ付、宿役人世話いたし、往来不差支様可致もの也

西四月三日

東海道

大津宿迄

品川宿より

伏見宿より

守口宿迄

但シ佐谷路共

木曾路

板橋宿より

海道

守山宿迄

但シ美濃路共

甲州路

内藤新宿より

海道

上諏訪迄

右宿々

問屋

年寄

そして「右御触流之外ニ、通日用請負人六組仲ヶ間百九拾四人之名前書を通ツ、差添有之、此方名前之通り間略之」とある。

要点は前条は宝暦一〇年七月東海道御触流と同趣旨であり、後条が通日雇の仲間申付(26)に関するもので、(一)仲間の町所名前を記した鑑札を宿方に渡し、道中の通日雇には下ヶ札をさせる。(二)旅籠錢も食札を使用する。(三)不埒があれば宿方から申出次第請負人が弁ずる。不払には請負人に申達し宿送りで道中奉行に届ける。(四)病人は宿役人が世話をする事から成立している。

なお前記の通日用請負人六組仲ヶ間一九四人は定飛脚問屋和泉屋甚兵衛「万年帳」(27)によると、江戸六組日雇頭仲間として日本橋組一二、京橋組五三、芝口組二〇、大芝組四二、神田組四四、山ノ手組二三、合計一九四人である。

再び「六組飛脚屋旧記」によると、

「四月三日御触流シ」(28)として在町御領私料に御触流があり、その内の通日雇関係は次の通りである。

一東海道宿々之内祝儀取等とか唱、江戸京大坂其外より持出候通日用人足より酒手等をねたり取候由、通日用人足共も若途中ニ而病氣之節、右祝儀取共世話致と申候故、常々酒手等を遣置候義も有之趣相聞候、不筋之時候、通日雇稼之者若道中ニ而病氣等之節は、門屋役人共江申聞候得ハ、差支之義無之条、以来祝儀取と唱候所行不致様急度申付候間、酒手等遣シ候義致間敷候

一通日用人足共義宿々ニ而品々不法不速ボカ之義有之趣相聞江不届ニ候、已来右体之義於有之ハ、当人共は勿論、請負候者迄可為曲事者也

即ち東海道宿々で祝儀取として酒手を要求されたが仲間申付によりその必要はなくなった事情が反映している。(29)

御触に伴ない四月二三日には品川から小田原迄の各問屋から日用方行事衆中に宛て、奉行所の仰付により六組引請

の通日雇人足の内で病人の際は宿役人が病氣見届の上で持物貫目に応じ賃錢を受取り人足を差出す。しかし「上方出之節」に足弱の人足を雇入れて道中で欠落するのを「足なし」と称するが、この場合は人足を差出さない旨を通知してきた。

なお願人は四月四日に根岸肥前守御役所、御留役御懸り大原四郎右衛門宅に口上書を、町年寄奈良屋、樽屋に口上を申上げた。同七日山村信濃守御番所、町年寄三家に口上書を差出した。ついで同一三日に六組仲間行事名を根岸肥前守御役所に提出した。人数は日本橋組二、京橋組四、神田組二、芝口組二、大芝組二、山ノ手組二、合計一四人で各組共に一人は月行事で残りは年行事である。同一九日に根岸肥前守御役所で大原四郎右衛門宅に礼に行った事を咎められ、この度の件につき御家中に音物を贈った有無を質ねられて否定した。この事を同夜両御番所に報告している。さてこの訴訟についての入用金は四月九日迄に金一一七兩で、半分は組割、半分は人数割とし、人数は一九四人である。合割では一組銀五八五匁宛、一人銀一八匁一分宛になる。各組出金割合は、日本橋組一三人金一三兩一步銀七匁二分、芝口組二〇人金一五兩三步銀七匁、大芝組四一人金二兩銀七匁一分、山ノ手組二三人金一六兩二步銀七匁三分、神田組四二人金二三兩銀一匁四分、京橋組二一人金一〇兩一步銀一匁三分五厘、同南組三二人金一五兩二步銀九匁二分である。その内で金三兩を願人五人と近江屋吉平分に引とあるのは、京橋南組についてであろう。

それから少したった同年八月二九日に京橋組年行事若狭屋忠右衛門代武兵衛は根岸肥前守の下に出頭し、御留役羽根田藤右衛門から延引している仲間名前印鑑を道中筋に送る件を実施する事と、同年八月に江戸六組と同様に京都一六、伏見一二、大坂九三人に仲間³⁰を仰付けられ、京伏見大坂の道中筋通日雇の者に道中間屋に渡す印鑑については江戸六組仲間の取計方と同様にすることになっているから、その点を彼等に伝授する様に仰渡された。

九月一〇日に印鑑を五海道宿々に宿継で渡方を願い、人足賃錢は上納する事としている。御懸り羽根田藤右衛門か

ら許可されたので六組から品川、板橋、千住、四ッ谷、内藤新宿の四カ所問屋に懸合を命じられ、宿継人足賃は入らない事になった。

そこで品川宿に印鑑帳一二二冊を渡した。同宿から守山駅佐谷路共六一次に一宿二冊宛である。同一四日に四ッ谷内藤新宿に内藤新宿から上諏訪迄一宿一冊宛で印鑑帳四五冊、同一五日板橋宿に同宿から守山宿迄美濃路共一宿一冊宛で印鑑帳七五冊、同日千住宿に同宿から日光鉢石迄二一宿と奥州海道白川迄一一宿に一宿一冊宛で印鑑帳三一冊が渡された。そして同一九日六組年行事から根岸肥前守御奉行所に各宿に印鑑帳を引渡した事が報告された。

以上寛政元年の仲間仰付と五海道御触流の経緯を記したが、この仲間は道中筋日雇仲間取極相願候一件吟味での桑原伊予守、根岸肥前守の申上に「是迄ハ賃錢等引下ケ、高直無之様入札等致し、仲間外之もの共、通日雇受負候もの有之候とも不差障様可致旨、申渡候様可仕候哉」とある通り仲間外の営業を禁止するものではない。また六組の願出は海道御触流のみで始まったが、既に天明二年には京大坂定飛脚問屋が申付けられているから、事件をつかまえた京橋南組及び六組仲間の動きは、ある程度迄は仲間仰付を予測しての行動ではなかったろうか。

通日雇は諸大名、旗本、町人等の往来に使用される者であるが、これ迄みた所では一度に五、六人の雇用である。阿波国徳島藩では徳島蜂賀家文書の寛政十年「御帰国之節諸事控」には合宿として上下拾貳人外二通日雇九人、上下拾壹人外二通日雇八人、上下拾壹人外二通日雇貳人、上下七人外二通日雇貳人、上下拾五人外二通日雇三人、上下七人外二通日雇三人とある。合計上下六三人に対して通日雇二七人が雇われている。

次に因幡・伯耆国の鳥取藩の場合には池田家編纂竹内峴南・梶川榮吉執筆「鳥取藩史 財政志」⁽³⁵⁾に収録されている文化七年四月「木曾地御帰国道中御入目帳」では、惣入用金二〇八六兩二步三匁二分六厘の内通し日雇代は金八九兩二朱六匁一分五厘であり、文化九年四月「御帰国御道中御入目帳」では惣入用金一九五七兩三歩二朱二分七厘

の内で通し日雇代は金七六五兩一步四匁二分七厘である。文化七年が約四二%、同九年が約四〇%に当るから参勤交替では相当な金額である。

そして元禄五年以来肥後国熊本藩出入の日本橋組大津屋喜兵衛は、寛政二〇年一二月晦日に悴富五郎が御上下の節の通人馬日雇方御用出精に対して御紋付御上下一具を下置かれ、翌一一年一二月朔日には喜兵衛に御紋附御拾羽織一を、悴富五郎には父同前に五人扶持を下置かれている事実がある⁽³⁶⁾。詳細は今後にまきたい。

寛政期の出入御屋敷と、定飛脚問屋との関係については別稿⁽³⁷⁾に譲る。

さて仲間内の株の移動については、寛政三年四月一九日付仲間惣代から道中御奉行所宛の一札によると⁽³⁸⁾、寛政二年七月に仲間からの願出通りに渡世止・休は届出、譲渡・新規加入は願出て差図をうける事を仰渡された。前記寛政元年四月の仲間取極の内を公認されたのかは明らかでない。そこで仲間の所付、名前、印形等も取揃えた帳面を差上げて、記載者についての譲渡、新規加入、実子跡株引受は何を出し、記載事項を改めた際には品川、千住、板橋、内藤新宿の宿から宿送りで通知する。帳面の変更方法は仲間から附紙を差出して貼付ける。新規加入と実子以外の親類縁者、他人への譲渡は仲間承認の上で願出て差図をうけた後に貼付用の紙に名前、所付を認め印形して提出する事である。これは必ずしも遵守されなかったらしい。文政九年五月には⁽³⁹⁾大芝組で同六、七、八年の三件の病死が不屈出であり、それを兄弟、甥の者が跡株を引受けて渡世しており、一般に大芝組では「受負人共之内死失又ハ跡株引受候儀ハ其時々届并願等不致仕来之様いつとなく成行」きの有様である。結局宥免をもって一同急度叱り置になり、寛政三年の趣を仲間一同守る事を求められた。

又休株に関連して文化一三年七月には⁽⁴⁰⁾京橋組加賀屋権之助、大芝組万屋弥助（同年四月一〇日休株）は困窮と病氣を理由に休株の身分に抱らず芝口組平野屋源八の手先となり松平肥後守様御旅行通し日雇に行ったのは家業不取締

として仲間が道中奉行所に訴訟し、吟味の結果加賀屋、万屋は平野屋から頼まれたのではなく、番組人宿家業の平野屋の親万吉が通し日雇を請負い、万吉から大芝組平七を頼んだが病気の為に、加賀屋を休株ではあるが頼み、また万屋は万吉と同家業即ち番組人宿もしているから休株と知らず頼んだ結果と判明した。以後は休株を届けた者は六組仲間内は勿論、番組人宿、地日雇稼の者が通し日雇を請負った場合には、頼まれても従事しない旨の取極をして御請証文を出した。これは通し日雇には各種の者が従事し、彼等の間には関係があつた事を示している。

五 文化二年「宿方日雇方双方議定」と文政六年二月素人加入申渡

仲間仰付後の享和三年三月、江戸の定飛脚問屋「仲間定法帳」⁽⁴¹⁾によると、道中筋通日雇仲間、即ち江戸六組飛脚屋仲間では「京都飛脚」、「京大坂上下宿三度飛脚屋」の暖簾を使用しており、定飛脚問屋側では「上下飛脚屋」を「日雇方」と唱える事になっている。さて文化元年七月二三日に、東海道品川宿より大津伏見守口宿迄美濃路佐屋廻り宿々本陣惣代品川本陣市郎右衛門・川崎宿本陣兵庫、中山道惣代板橋宿問屋八郎右衛門、日光道中千住宿より宇都宮迄一七カ宿・奥州街道白沢より白川迄一〇カ宿、水戸通り三カ宿本陣惣代千住宿本陣市之助後見惣兵衛、甲州道中内藤新宿より上諏訪宿迄四一カ宿本陣惣代内藤新宿本陣兼問屋喜六から、通日雇の道中での不埒を道中奉行所に訴え、同二年に和談したが、その際に両者に議定が取替された。文化二年四月二十九日付品川宿本陣から道中奉行所に提出された下書伺によると、「宿方日雇方双方議定」として一二条から成立っている。内容は(一)訴訟の経過と道中奉行所から渡世方行立方の懸合を仰渡されたので議定が成立した事。(二)本陣・脇本陣と休止についてであり、御諸家様方旅行に本陣以外での御休、御小休については正徳五年六月に御触が出ているが、猥りになっているから宿方の衰微につながるので日雇方元締(六組飛脚屋)が通人足請負の際には江戸御国共に御発駕前に、本陣・脇本陣以外での御休、御小休は願つ

てはならず、「元〆何屋誰」の先触を出しておく。又手廻り頭、棒頭共は途中では宿以外での御差留を願ってはならず、宿外で臨時に休を仰付けられても成丈け本陣休を願う。今後駅場で差障があれば請負元締名前を江戸六組年行事に届けて取締る。尤本陣隣家に休宿、支度、昼飯等は宿が準備する事。(三)請負人の苗字帯刀については、諸家旅行の際には請負人元締はその家来になるから苗字帯刀するが、宿では相互の渡世であるから武家としてでなく請負人元締として懸合う。(四)重立衆の別立をしない事で、諸家旅行に際して家中の重臣の別請負をしても、一諸に請負元締が差配するので宿も其旨を心得る事、そして日雇方旅籠銭は今後本陣に一手支払とする。(五)提灯持人足は諸家旅行では請負人数ではないが、御差懸り臨時御入用である。この人足と病人足痛などがあると請負方の難儀になるから宿方で八〇人位雇ってやる。問屋場には臨時問人足はないから稼人足であり、賃銭は御定賃銭の一人半、二人前迄で二人前以上は出さない。賃銭は惣代では定められないから惣道中筋一宿限り直段を定め日雇方年行事に申聞せる。人数は十人位に限るから多勢入用の時は宿場人足請負人に知らせて成丈け働かせる。(六)博奕の禁止で、御泊宿で元締方帳場の外、「徒士、足輕并人足共下宿」で夜通銭取遣り勘定をしてはならない。若しあった場合には宿から江戸六組年行事に通じ仲間から除く。(七)祝儀銭については、奥州街道宿々にある人足部屋の者が御泊宿、御昼休宿に日雇方元締帳場に酒肴持参して祝儀銭を要求し、宿方の人足を、肩入に借入を求める。断ると乱妨し扱人が入って酒代を取られる。外の街道でも例がある。この様な事があれば本陣が引受け元締方の妨にならない様にする。(八)御武具持足輕等の旅籠銭については、諸家旅行と御家中方離れ通行の際の請負内の御徒士、御武具持足輕分は「何之守護」と云う宿札であるから御家中同様である。日雇人足が刀差武具持等御貸人足になっても、その主人と同宿の場合は御家中並の旅籠銭を受取り帳場引受にする。同宿でなく下宿の場合には、江戸六組日雇方であれば米相場に高下のない内は壹人前錢一四〇文払とする。箱根宿は特に錢一二文増とする。帳場宿を勤める旅籠屋には夜通になるので茶代等の心附を出す。

(ハ)江戸六組の取締引受の範圍は、諸家旅行請負と同様に宮、公家、役家旅行請負の場合も宿から江戸六組年行事に非分があれば届ける。素人請負、京大坂伏見御国仕出の分は関係ないので宿から其筋の役人に達して奉行所に訴える。
(ニ)万石以上の定出入諸家の元締名前を「何之守様ハ何屋誰」と別紙に認め、街道筋宿々に渡しておく。御直段入札に落札しなかった際は、其旨を宿方に廻状で伝え、宿方はその心得で支度賄立をする。
(三)諸家旅行の素人請負と諸御国仕出日雇方請負の場合については、両者共に公儀御免の渡世人でないし、宿方も平生接触していないから、臨時御差掛提灯持と病人、足痛、落人足等には相對雇人足を貸さない。江戸六組日雇方以外の旅籠銭は家中並とする。なお加州様、越州様は江戸御発駕前に御国迎人足がきて御供するので、小宰、宰領を六組から添えるがその旅籠銭は御家中並にする。
(四)江戸入の祝儀銭については、諸家江戸着の際に品川、千住、板橋、内藤新宿の各宿に江戸渡徒士、手廻り、陸尺、押の類が江戸入御迎と称し、御家御抱でないのに肩入と称して請負元締と道中計り渡世の徒士、手廻り、陸尺に酒肴を求め御出立懸り本陣前で口論し御発駕を遅れさせる。以後は本陣が引受けて訴え、請負元締人が難儀しない様にする。

以上によつて江戸六組仲間と宿方が公儀御免を理由に協調している事が判かるが、これに関連して文化二年四月九日には品川宿本陣惣代市郎右衛門外拾人から道中御奉行所に宛て、江戸六組日雇方の元締の顔、名前を知らない本陣のため、六組に御奉行所から御鑑札下附を願出ている。

そして同年七月九日には「宿方日雇方双方議定」が聞届になり、一一通認めて双方連印し五街道に一通宛と六組行事方に一通宛を請取る。宿々と日雇方仲間も銘々写を持つ事になった。御鑑札は願の通に御焼印を下さるから木札の提出を命ぜられた。なお宿々の間の村宿泊については正徳年中御触を五海道に再御触になった。⁽⁴³⁾

既にこの議定で問題になっているが、主として素人請負等に関する江戸六組仲間行事から道中御奉行所に対する願

書が同年八月四日に提出されている。⁽⁴⁴⁾即ち先ず御焼印御鑑札は保管箱を各組に作製し、入用の際は行事に何之申請負明朝出立の旨を当人が届けて受取り、書付に印形をする。帰着の上は即刻返納する事とする。次に素人について、彼等は六組仲間内の者の尻付を頼みにして請負い、資金も乏しいので留守宅、道中分の金子は借用する。一度限と考えられているから金子欠乏で、道中不取扱を起すとの大義明分で五海道宿々本陣惣代と六組仲間の間に議定が取替され各々一通宛所持する事になった。内容は(一)江戸六組仲間の者は素人請負の用先に加判してはならない。(二)素人請負の人数割取をしてはならない。但し京大坂伏見組株のある者は格別である。(三)素人請負の御屋敷様方について仲間の者が素人と兩人で請負ってはならない。万一の場合には御証文を納める際には仲間組月行事が同道する。兩人でも仲間の者があれば請負人に立ち素人を加判にする。(四)素人請負の用元え宰領、世話役、帳場の引受をしない。(五)六組仲間には御屋敷出入持とそうでない者がいる。出入御屋敷方請負諸事引受人又は御長持宰領小差に至る迄元締人に対して不勘定の事があれば年行事に届け調査の上で「相立」させる。若し済まない時には仲間中申合せて組合請負に使用しない。そして名前を銘々店先に張札する。(六)出入御屋敷のない者を仲間内で用先に用いれば家業の永続が出来る。

これにより江戸六組仲間でも営業の規模に内部では差がある事が知られる。

さらに諸家様方御用向請負には「徒士足輕平日雇荷物人足等」迄も江戸で雇って召連れて勤める。御国元から参勤には其国や京都、大坂、伏見、在々から雇集めて御供にし、到着すると暇を与えられる。その人足は江戸六組仲間の元に入込み、外の御用がある迄囲置き生国出生名前を糺しておくが、内には素人で平日地日雇稼の者の方に入込む者もある。⁽⁴⁵⁾六組で囲っている人足については江戸旅人百姓宿、奉公人番組人宿の様に御糺を仰付けられたい旨を願っている。最後の点は通日雇が日傭座の対象であった名残りである。⁽⁴⁶⁾

この八月四日付願書に対する町々差障の有無について南北年番名主は同一七日に⁽⁴⁷⁾素人請負は武家方屋敷に数年来

出入して平日は地日雇を差出し、その便宜から参勤御暇、その他の遠国御用や遠国御用番交代の出立に徒士、足輕、荷物人足等に至る迄を請負う。そして近辺で人数を集められない場合には外から身元慥かな者を雇入れて渡世をする。一方雇れる側の日雇稼の者は其日稼であり地日雇許りでは暮せないから、素人請負は勿論六組仲間にも手寄をたよつて入込む場合がある。六組側でも囲置いてある国々から罷越した上下日雇丈けで間に合ない時は地日雇を雇う。若し八月四日付の願が通れば六組にとっては御鑑札所持は道中好都合をもち、素人は持たないから不都合になる。自然素人請負は出来なくなる。又六組飛脚屋が素人に加判させても結局素人請負はなくなるから、従来通り差置く事が右筋渡世の者の意見としている。

これによつて六組飛脚仲間が人足の雇傭に當つては素人請負の者と余り事情は変らない事が判る。

この意見に対して同年閏八月朔日に町年寄奈良屋の再調は⁽⁴⁸⁾差障りカ条として議定の(一)―(四)を挙げ、恐らく六組側の意見と思われるが寛政元年四月の仲間外営業を禁止するものでない事を認めた上で、六組仲間は太勢であるから仲間の競合で賃金引上げや下方日雇取賃金の不足渡の事態は起らないと、今一応の糺を求めている。

後年の文政一〇年二月付道中通日雇・地日雇請負人三拾人・六組飛脚屋年行事の済口証文によると、⁽⁴⁹⁾この文化二年に差障りを申立したのは道中通日雇・地日雇請負渡世の四七人と人宿である。町年寄奈良屋が四七人と六組仲間との懸合を命じたが、四七人は断つてゐる。人宿は同年九月に六組の御鑑札の内で一組二枚宛を頂戴する事にしたが、四七人は翌三年六月に従来通りの渡世を願出た。しかし十一月に六組に新規加入差障りなしと申渡され、同四年四月に人宿は一組二枚宛、四七人は銘々一枚宛として六組飛脚屋と共に三者が連印して願出た。同五年一二月九日付本陣惣代の道中御奉行所宛の御請証文⁽⁵⁰⁾によると、人宿と四七人が通日雇請負を理由に、六組にのみ御鑑札を渡す事は差障があるとの申立は、吟味の結果差支の筋がある事は相違ないと認められた。即ち御鑑札は遠路本陣が日雇方元締の目印と

して渡されたが、これは寛政元年六組仰渡のみでよく、六組内部取締は議定等閑の者を訴ればよいから、御鑑札は強て必要でないとは本陣惣代、六組年行事共に申上げて御吟味下げになった。従って番組人宿、地日雇稼側の主張が通った訳である。

さて文政四年四月には⁽⁵¹⁾六組通日雇請負人年行事に諸家道申請の際には諸家姓名、発足日限、請負人名前住所をその都度毎に届ける様命ぜられ、同五年閏正月には⁽⁵²⁾高家、大御番頭、両御番頭に対して道中取締を理由に江戸での雇傭には六組通日雇請負の者に申付ける事を命じている。

なお同年一月には東海道での祝儀取と通日雇人足の不法について寛政元年四月の御触が再び触出されている。⁽⁵³⁾

そして文政六年二月に六組から願出て、同年四月一四日には道中取締のため、素人で通日雇宿をする者は六組飛脚屋仲間に加入する事が申渡された。⁽⁵⁴⁾

これ迄の問題とはずれるが、これより先、文化一二年四月日光御法会に際して六組は通日雇請負を申付けられたが京家発興を理由に、人足雇出と人足雑用その他の手当取締が出来ないとして断った。しかし後に京橋組は人足百人、芝口組は同五〇人を差出した。これが問題になり、同年一二月の道中奉行から老中への御届には、人足を出さなかった日本橋、大芝、山之手、神田組の年行事は通日雇請負渡世取放。年行事でなくて人足雇出申渡の際に在江戸の者は一同過料錢五貫文宛。当時江戸不在の一四人は代の者申付方等閑であり、その内の一人である年行事は跡引受行事なしで遠国したから過料錢五貫文、残り一三人は急度叱りにする。なお休株、転宅等の不届の事もあるから前記御咎に込めて各々相当の御咎を申付けるべきであるとしている。

この際に通日雇・地日雇請負渡世四七人は芝口組に元手金五〇両を用立し、更に芝口組の金一〇〇両借入の請人になり、又人足五〇人中の二五人は、上記四七人から差出したものである。

なお文政七年日光御用人馬請負は六組に懸合の上で四七人のみから人足五〇〇〇人、馬五〇〇足迄の請書を出している。⁽⁵⁵⁾

六 文政九年「六組仲間規定帳」

文政九年五月に「六組仲間規定帳」が作製された。⁽⁵⁶⁾二七カ条から成立ちその内容は(一)(公儀・御屋鋪)御公儀法度と御屋鋪方作法を守る事。(二)(請負届出)御奉行所へ通日雇請負人数を届けるのは、御屋敷から仰付けられると出立日限、道中筋が不明でも何之守様御請負と届ける。差懸り請負を仰付けられたら出立は前々日か前日朝迄、着は当日夕方迄に年行事に申聞せる。若し失念した場合にはこの規定により年行事に不調法はないから、その請負人同道で御詫を願う。(三)(御屋鋪方請負心得)御屋鋪方通日雇用向には請負証文外の賃銀を願うてはならない。発駕、着の際に下方召遣の者が喧嘩口論のない様に請負人が申付る。(四)(下請負の心得)下請負と、小差、陸尺、奴、手廻り、平日雇迄願う間敷い事のない様に申付る。(五)(臨時御用向)臨時用向の時は其組限り相仕立にする。尤請負人が懇意の筋合で率領などを遣す場合は当人相對とする。下り率領などの名目を付けて無心されてもやらない。不正の事を申出る者は年行事が訴訟する。(六)(素人対策)素人で通日雇請負の者に仲間の者は下請負、加判をしてはならない。行なった場合は仲間相談の上で番組を除く。(七)(宿に対する心得)通日雇請負の者は道中筋宿々問屋、泊宿に難儀を申かけてはならない。(八)(道中無錢飲食)道中筋の立場茶屋で無錢呑喰の者があれば、其請負人が払って置き、糺した上で仲間申合て以後雇わない。(九)(休株の者の営業)仲間内で休株の者が道中家業した場合には仲間相談の上で訴訟する。(十)(地日雇、素人の仲間加入強制)地日雇渡世の者、素人で上下渡世の旅人を差置く者は仲間に加させ、仲間規定を守らせる。(十一)(御屋敷発駕の際の御屋敷方発駕の際、渡り徒士、陸尺、手廻り、押などがねだりをし

て出入になった時は其組の年行事が引受けて訴訟する。(㉒) (下方引受の者) 御屋敷請負の際に下夕方引受の者は雇手代であるから「引負」があれば、その勘定を済させる。万一済まない場合には、其「仲間より済方致し候もの引受可申事」。(㉓) (人出宰領) 通日雇の人数が少なくて「人出宰領に遣」った場合には、年々分賃銀を取極めて遣う。借越の出来た時は返済させる。若し済まない者は仲間申合て家業を以後させない。(㉔) (京大坂伏見仲間衆中江戸表臨時御用向) 京大坂伏見の同家業の仲間が江戸で臨時に用向を仕立てる時には、六組年行事が立会い余分の宰領は勿論の事、下り宰領の名目をつけてはならない。(㉕) (出入御屋敷) 江戸京大坂伏見の仲間内の者は江戸六組仲間の旧来出入御屋敷方に無沙汰に立入って請負をしてはならない。入札は存寄次才だが其旨を旧来出入の者に懸合った上とする。(㉖) (行事申出) 仲間年行事が申出る事は仲間相談の上であるから守る事。(㉗) (行事撰出) 前からのきまり通り仲間内から年行事・月行事を定め順番に勤める。(㉘) (年行事役給) 年行事役給は年組合人別専人金壹分宛、正月初寄合に出す事。(㉙) (初寄合費用) 正月初寄合には会料、膳代として専人金壹朱宛出金の事。(㉚) (家督相続、休株再勤) 家督継目は御奉行所聞済の上で行ない、年行事に袴代金百疋、組合中に扇子金二百疋を正月初寄合の際に出す。休株の再勤も同様である。(㉛) (下請負) 下請負を申付ける場合には、遠近道中仕様により下方請負証文を取っておく。なおこれは仲間内の場合と推測したい。(㉜) (仲間以外の下請負) 仲間外の下請負引受はしない。子方、別家の者でも同様である。若しあった際は年行事申合の上で御奉行所に届ける。(㉝) (請負人差出金) 通日雇請負を御奉行所に年行事から届ける際、遠近の差別なく請負人から年行事に次の額を差出す。国持大名一頭に付金壹分宛、大名、旗本一頭に各金二朱宛、女中方一建に金二朱宛、家中方通日雇拾人迄錢三百文、同拾人以上金一朱宛、同二拾人以上金一朱宛、再届錢三百文宛である。(㉞) (改印等届出) 改印、転宅、家主名前替等は年行事に届ける。(㉟) (仲間寄合) 仲間寄合には必ず出席する事。病氣、他国の際には代人を出す。不参者は理由によつては御奉行所に届ける。(㊱) (仲間入用) 惣仲間入用

は人数割にする。(58) (組内不幸) 組内不幸は親子夫婦に限らず香典一人前錢百文宛とする。

以上従来の仕来りを成文化した場合が多いと考えられるが、仲間内部、同外部、雇人に大別出来る。外部は矢張り素人対策が主である。そして彼等は輸送業者ではあるが、営業は番組人宿とかなり類似した面を持っている。

この規定により文政九年一月には芝口組、大芝組で各一人が仲間出金について組合から申立て解決している事実があり、又同年七月には議定(59)に礎き、駿府加番の請負が従来神田組上州屋善次兵衛に固定していたのを、加番役御屋敷旧出入の者が請負う事になった。(59)

七 文政九年道中通日雇・地日雇請負人四七人加入

文政六年四月素人で通日雇宿をする者は六組飛脚屋仲間⁽⁶⁰⁾に加入すべき旨の御触により、同一〇年に四七人が加入した。この間の事情は同年の二つの済口証文等によると、文政九年七月二三日に六組仲間⁽⁶⁰⁾は道中通日雇・地日雇請負人兼房町市右衛門店多助外三〇人が加入に應じないので訴訟し、その内三河町三町目家主喜助外一三人は通日雇宿をしない一札を入れ、残りの桜田兼房町市右衛門店多助外一六人は同一〇年一月二三日に召出されて御利解の趣を弁ないとして多助は手鎖になり結局二月一三日に済口証文を出して加入する事にして多助の手鎖御預御赦免を願っている。

又道中通日雇・地日雇受負人三拾人惣代桜田善右衛門町又八店多吉外一人(源七)は文政九年九月二二日に後難を恐れて六組飛脚屋年行事を相手どり訴訟し、同一〇年一月二三日に前記多助等と共に打合吟味になり六組加入を命ぜられ、多吉、源七は素人に該当しないとの心得違により手鎖御預を仰付けられ、これ又御赦免を願っている。三人は願い通り御下げになり、両者の合計四七人が加入した。加入金一人当金五両宛で、当金二両二分を出し残金二両二分は文政一一・一二年の二カ年に渡す事になった。

文政一〇年三月に六組飛脚屋年行事から加入を申立て聞届けられ、加入者は御奉行所に罷出たので六組仲間名前帳に名前を認入れ印形を取り手続を完了した。

なお多吉外一人の済口証文には「私共同様ニ渡世之もの共御府内ニ多分御座候得共、貧窮之もの共故差障難申」とあるからこれで素人Ⅱ地日雇全部ではないが、主要なものを加入させたのであろう。

これで残る番組人宿については同年五月に、番組人宿仲間の内で通日雇請負の者は所付、名前、印形取揃の帳面を道中奉行所に差出し、新規に請負う者は申立てる。諸向の通日雇請負、代替、渡世相渡、休、名改、印形改、所替、家主替りは其都度届け、請負は全て奉行所の差図をうける。つまり六組同様の取扱になる訳である。⁽⁶¹⁾

南和男氏の研究によると慶応二年には番組人宿の扱う内に道中通日雇、道中飛脚などがあるから幕末迄続いたろう。⁽⁶²⁾ さて文政一一年九月には通日雇請負人と番組人宿に対して、道中通日雇が宿々で不法の振舞があり、宿方から銭を借りて博奕を行っているのは、寛政元年仲間定、文政四年の道中御触に抱らず不取締であるから、宿々で日雇が博奕を催した場合には其請負人の渡世差止にする旨を申渡している。⁽⁶³⁾ 通日雇の不法行為は多かったと思われる。⁽⁶⁴⁾

八 幕末・明治初期

天保一二年一二月一三日付「十組上納金御免仲間組合御停止之事」⁽⁶⁵⁾により、六組飛脚屋は差止になった。⁽⁶⁶⁾ ついで嘉永四年の諸問屋再興によつて、⁽⁶⁷⁾ 六組飛脚屋は再興になった。⁽⁶⁸⁾

嘉永元年四月四日付遠山左衛門尉から老中宛の上申書に添えた「諸問屋株式銘書」には再興申付分の内に六組飛脚屋が人数一五〇人程、番組人宿は二七〇人程とあり、人数は増減があつて定め兼ねるとしている。⁽⁶⁹⁾

ついで同四年七月付町年寄「六組飛脚屋之儀取調候書付」によると、六組飛脚屋は人数制限のない組合であり、現

人数二〇八人の内で前々から渡世の者一九八人、天保一二年以降新規渡世の者一〇人である。仲間としては寛政元年仲間御定、文政六年仲間取締方仰渡、同年より町年寄に名前帳を提出、天保一二年仲間差止の経過である。若し組合再興の際には名前帳を町年寄方に取置き、加入、譲替等は組合差添で願出る、そして御内寄合で何の通りに進退する事とある。同年七・八月両町奉行所諸間屋再興掛は再興を可としている。⁽⁷⁰⁾

幕末から明治にかけての六組飛脚屋の具体的な事は残念ながら不明である。

さて江戸六組飛脚仲間の人数は第一表の通りである。嘉永四年三月、慶応四年（明治元年）六月は「諸間屋名前帳五十六 六組飛脚屋」⁽⁷¹⁾ 嘉永六年四月は「江戸六組飛脚屋仲間」⁽⁷²⁾ 万延元年閏三月は「江戸六組飛脚屋仲間」⁽⁷³⁾ によった。全体の人数は二〇〇人を前後している。万延元年に減少しているが幕末の政局の影響が具体的な事は不明である。特に日本橋組には殆んど変化がない。山之手組に変化が若干ある。

しかし「諸間屋名前帳」により嘉永四年から慶応四年迄の加入、休業についてみると、加入は日本橋組なし、京橋組二十九人、芝口組九、大芝組一七、神田組一三、山之手組七、合計七五に対して、休業は日本橋組二人、京橋組二二、芝口組一六、大芝組一八、神田組九、山之手組一六、合計八三である。時期的には嘉永四―安政四（A）、安政五―文久三（B）、元治元―慶応四（C）に区分すると、加入はA三二、B二四、C一九で、休業はA二八、B八、C四七である。内部では矢張り出入が相当にある。幕末の動乱期に一概に休業が多いとのみは言えない。

さて寛政元年五月の家主（A）、店借（B）の区別は⁽⁷⁴⁾ 日本橋組Aなし、B一二、京橋組A二、B五一、芝口組A二、B一八、大芝組A一四、B二八、神田組A五、B三九、山之手組A六、B一七、合計A二九、B一六五である。全体では家主が約一五％に過ぎない。

次に嘉永四年三月の店別表は第二表、慶応四年六月は第三表の通りである。店借は寛政元年の八五％から、嘉永四

組 名	延享元年 4 月	組 名	寛政元年 5 月	嘉永4年 3 月	嘉永6年 4 月	万延元年 閏3 月	慶応4年 6 月
日本橋	22	日本橋	12	13	12	10	11
京 橋	22	京 橋	53	58	53	53	65
芝 口	24	芝 口	20	24	21	20	17
本 芝	15	大 芝	42	39	47	37	38
神 田	26	神 田	44	33	32	28	37
赤 坂	15	山之手	23	41	38	26	32
合 計	114	合 計	194	208	203	174	200

第1表 江戸六組飛脚屋仲間人数表

年七三%、慶応四年四五%と減少しており、同居もあるが地借が慶応四年に五二人いるのが注目される。これが何を意味するかは今後にまきたい。⁽⁷⁵⁾

ところで日本橋組伊勢町家持大津屋喜右衛門は、文政七年三月「江戸買物独案内」上巻には「十組 ⑤ 蠟間屋 伊勢町 大津屋喜右衛門」とある。従つて六組飛脚屋の外に蠟間屋でもあった。年月不詳に大津屋七代の倉喜房が「家祖よりの産業を、六祖の亡父了寿まで伝りしを譲うけ勤め来りし後、また熊府の貴藩よりの命にて、館に使かふ定詰の僕士はた小者等を抱へ納る事を掌り、其のち御産物の生蠟を東都に弘め鬻くわさを務しハ」⁽⁷⁷⁾とあり、大津屋は六組飛脚屋の外に番組人宿乃至地日雇請負的な仕事もし、その縁で熊本藩の蠟取扱をしている事が知られる。

水前寺稻荷社江石燈籠御寄進御願書達置候処、郡九郎太郎方より別紙之通達有之候間、左様御承知可被成候已上

十二月廿四日

新美貞平

大津屋

喜右衛門様

即ち水前寺稲荷に石燈籠を寄進しているが杉本富士夫氏夫妻の御調査によると、それは熊本市水前寺公園の水前寺稲荷の神殿左右に現存しており第一・二図の通りである。⁽⁷⁸⁾ 基盤の長さ五五センチ、同高さ一五センチで全体の高さの約一八〇・九〇センチと推測される。竿の正面に「奉献 松田喜右エ門」、右側に「文化十四年丑九月吉日」と彫まれている由である。大津屋は松田氏である。

稲荷神社前の縁起を記した立札によると文化六年一月細川家一〇代藩主斉竈が勧請したものであり、圭室諦成氏

組	家持	家主	地借	店借	同居
日本橋	人 3	2		7	1
京 橋	8	1		46	3
芝 口	4	2	1	17	
大 芝	12	1		25	1
神 田		4	1	27	1
山之手	5	3	1	30	2
合 計	32	13	3	152	8

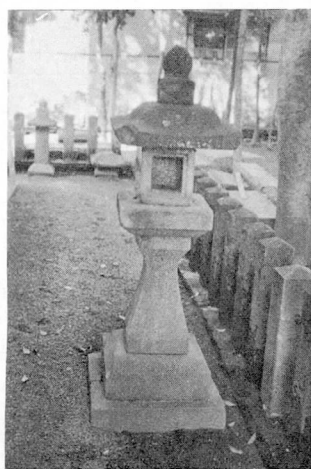
第2表 嘉永4年3月店別表

組	家持	家主	地借	店借	同居
日本橋	人 5		2	3	1
京 橋	2	3	15	39	6
芝 口	1	2	5	8	1
大 芝	10	4	9	13	2
神 田	1	6	13	14	3
山之手	4	4	8	13	3
合 計	23	19	52	90	16

第3表 慶応4年6月店別表



第1図 水前寺稲荷社
石燈籠 (左)



第2図 水前寺稲荷社
石燈籠 (右)

の研究によると斉茲は享和三年に水前寺に蠟締所を設立している。⁽⁷⁹⁾ そして文化三年九月に肥後藩は水前寺蠟締所と櫛方でのみ櫛実売買を命じているので、この石燈籠は六組飛脚と蠟で松田氏大津屋が細川家肥後藩と深い関係があった事を示している。

この様な六組飛脚屋の兼業は明治二年九月書上によると、日本橋組では紙小売扱一人、葉茶扱一で、芝口組では葉茶扱一、下駄扱一で、大芝組では蠟燭取扱二、反物小切類一で、神田組は筆類扱一、砂糖小売扱一、炭薪扱一で、山之手組は古道具類扱一で、四ッ谷組は小切類扱一、葛籠類取扱一で合計一三人が主として小売業を兼ねている。四ッ谷組と旧組との関係は不明である。

一方明治二年二月商社肝煎役には、⁽⁸¹⁾ 一番組で明治三年に通日雇渡世米屋久右衛門、通日雇山鹿屋政吉、四番組では六組道中日雇方米屋田中佐次兵衛がみえている。又二番組に蠟・下り蠟燭 家号大津屋 松田喜右衛門がある。彼等
は小売兼業の者よりは営業が大きいだろう。大津屋が明治二年に通日雇を廃止したかは不明である。

松本四郎氏の研究⁽⁸²⁾によると、明治初期には赤坂表伝馬町一丁目、元赤坂町には六組は見当らない。従って各一人いた山之手組は転業か廃止したのだろう。赤坂裏伝馬町一丁目家持一人が六組人宿である。推測の域を出ないが、六組の多くの者は明治期には日雇稼、番組人宿、香具渡世などに転じて行ったものではあるまいか。大津屋の様に生晒蟻間屋松田喜右衛門として残った者もあるが、⁽⁸³⁾全体の動きは明らかでない。「問屋沿革小誌」は番組人宿について「当今⁽⁸⁴⁾廃絶ス」としているから、六組飛脚屋は番組人宿よりは続いたのであろうか。

註

- (1) 児玉幸多「宿駅」(日本歴史新書)七八―九三頁
- (2) 日本通運株式会社「社史」三九―四〇、五〇―五一、五六―五七、八五―八七、九三―四頁
- (3) 三井文庫蔵本
- (4) 「江戸叢書」巻の四 七〇、一三〇頁
- (5) 慶応義塾図書館蔵本、なお朝倉文彦・安藤菊二・吉田羊一編兼校「末刊文芸資料」第二期六六四頁
- (6) 高柳真三・石井良助編「御触書寛保集成」(一二七六一―六五五頁)
- (7) 「同右」六五六頁
- (8) 「同右」(一二七六一―二)六五六―六七頁
- (9) 「同右」(一二七七一―三、四、五)六五八、六六〇、六六一、六六四頁
- (10) 新井白石著、羽仁五郎校訂「折たく柴の記」(岩波文庫)一五四―一五頁
- (11) 滝本誠一編纂「日本経済大典」六卷三〇頁
- (12) 「同右」五卷二六六頁
- (13) 近世史料研究会編「正宝事録」(二四二四)三卷七頁
- (14) 「六組飛脚屋旧記」には一橋大学附属図書館本と通信博物館本とがある。前者には「東京高等商業学校図書之印」があり、「明治卅八年十一月廿二日購入」とある。後者は駅通局の用箋に書かれたもので、「駅通局図書印」があり、「駅通局図書第二四四号共二冊」とある。そして外側の表紙には「六組飛脚屋旧記 乾・坤」の題簽がある。その他の詳細は省略するが、両者は同系統の写本である。唯後者は数行脱落している場合を含めて七カ所程の脱行があるので、本稿では前者を使用する。
- (15) 児玉幸多氏によると「荷物の積み卸しをする者」(「宿駅」七九頁)である。
- (16) 「都合式拾式人」とあるが記載は二〇人である。
- (17) 高柳真三・石井良助編「御触書宝暦集成」(二〇〇九―一、

三、四) 三四〇、三四三、三四五頁

(18) 「同右」(一〇一一) 三四六—七頁

(19) 後の記述では「順右衛門」となっている。

(20) 六月一日に京橋吉野屋羽右衛門、神田三河町加賀屋仁右衛門が旅人を見送に行き品川観音前で悪党に乱妨され訴訟する事件があり、同一六日落着しているが省略する。

(21) 東京大学史料編纂所編「大日本近世史料 諸問屋再興調」
三三—三四頁

(22) 「類集撰要」二十八 六組飛脚(国立国会図書館蔵)

(23) 「五街道取締書物類寄拾六之帳 通し日雇之類」(児玉幸多校訂「五街道取締書物類寄 上」近世交通史料集一 七四八—五一頁)

(24) 讓渡については、「道中秘書六」(「古事類苑」政治部四「一三三六—七頁」)に「飛脚渡世讓渡之願」として次の通りである。(原文には返り点あり)

差上申一札之事

道中飛脚屋仲間大芝組品川四丁目喜兵衛店信濃屋文四郎儀病身二付渡世難相成候間右文四郎実甥赤坂町五丁目弥右衛門店米沢屋孫太郎江相讓相続為仕度奉願候右願之通御開濟下置候は、先達而奉請取置候御鑑札之名前御書替被下置候帳面名前印形懸紙仕差上道々宿宿江は是迄之通私共々相達之帳面名前も懸紙可仕旨申上候処願之通御開濟被成下候旨被仰渡難有承知奉畏候仍御請証文差上申処如件

二五二

道中飛脚屋太芝組年行事

芝西応寺町源次郎店

寛政十年十月九日

金五郎

道中御奉行所

前書被仰渡之趣私共義も罷出承知仕候依之奥書印形差上申候以上
右

家主

五人組

右願之通御開濟之旨上野八太郎申渡証文取之

休株の場合については「類集撰要」二十八に文化一三年六月以前に京橋組芝西応寺町源兵衛店加賀屋権之助、大芝組芝西応寺町政五郎店万屋弥助が多病不如意を理由に休株を願ひ開濟された事実が記されている。

(25) 石井良助校訂「徳川禁令考」前集第六(三四三七)道中筋小場所通日雇等之儀二付触書(七七—八頁)は前書がないが寛政元年四月日付で肥前・伊予判とある東海道宛のものである。なお「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七五〇—一頁)に触書案が記るされている。

(26) 仲間申付の年を拙稿「通信と飛脚」(豊田武・児玉幸多編「交通史」体系日本史叢書24(二〇六頁))では文政六年としているのは誤りであるから寛政元年に訂正する。

(27) 東北大学附属図書館所蔵「江戸六組飛脚問屋書留」。本史料は内容からみて「万年帳」である。この点については拙稿「定飛脚問屋和泉屋『万年帳』について」歴史四二輯参照。

(28) 高柳真三・石井良助編「御触書天保集成 下」(五五五六)四五〇頁に同文の御触書が収録されているが、日付は三月である。「類集撰要 二十八」にはこの御触書は三月で町中連判の請負手形は四月となっている。

(29) 寛政元年四月の根岸肥前守御役所からの「小揚取祝銭取之悪者共嚴敷御触流」があつたので、四月箱根宿伊右衛門他の者が六組にきて箱根宿は人足継立御免場の宿に抱らず宿方役人が差留るので、従来通り小揚取世話の出来る様に交渉を願出た。同年七月彼等から一札をとつた上で六組の内一四人から箱根御役人中に宛て御沙汰の際には罷出て苦勞をかけないから、四人の者に「当地之義は継人足御免之場殊ニ山坡難所ニ付差懸り病人等致出来候節小揚取底底ニ而甚難義仕候間」従来通りの営業を願っている事実がある。

(30) 「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七五二一三頁)、「駅肝録」(「日本交通史料集成」二輯二八九頁)参照。

(31) 寛政元年の事については「駅肝録」(「前掲書」二八八—二九〇頁)、「古事類苑」政治部四一三〇—二五頁にも記載されている。

(32) 「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七五〇頁)

(33) 「駅肝録」(「前掲書」一三三—一三頁)

江戸六組飛脚問屋仲間について(藤村)

(34) 史料館所蔵

(35) 鳥取県編纂「鳥取藩史」四卷四八—五〇頁、なお鳥取藩の「総御法度」(七八)「藩法研究会編」藩法集2鳥取藩二五—六頁)には宝暦一〇年正月付で「日雇之者江戸京大坂之御家中供ニて罷越節証札之事」として

一町中并御家中長屋之居申者、日雇ニて江戸・京・大坂へ御家中之面々之供ニて罷越候節、日雇之者奉行所へ罷出、日雇証札を請取可申候、相雇候主人も右之日雇証札無之者召連申間敷候、尤右之証札主人手前へ取上ヶ置召連可申事、とある。

(36) 一橋大学附属図書館所蔵「飛脚問屋大津屋書類」

(37) 拙稿「定飛脚問屋和泉屋『万年帳』について」歴史四二輯、なお延享元年に若狭屋忠右衛門が継早馬に従事している事実がある(通信博物館所蔵延享元歳三月吉日「日記四番」、宇野脩平稿 日本通運株式会社「社史」五〇—一頁)がある。これについては定飛脚問屋を研究する際に譲る。

(38) 「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七五二—四頁)

(39) 「同右」七三三頁

(40) 「同右」七六三—四頁。「類集撰要」二十八。

(41) 「飛脚仲間惣まく理」(「日本交通史料集成」三輯一六五—六頁)

(42) 「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七五四—九頁)

(43) この御触は文化二年七月一六日付「問之村休泊御差止方等

「請書」(大阪経済大学日本経済史研究所「東海道草津宿史料(奥村家文書)」九一〇頁。なお本史料は大阪経大論集四三号にも所収されている)に当たると思われるが、後考にまちたい。

(44)「類集撰要」二十八。なお同文のものが「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七五九一六〇頁)にあるが、鑑札についての前二頂を欠いている。

(45) (46)南和男「江戸の社会構造」二八二三頁参照

(47) (48)「類集撰要」二十八

(49)「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七四三三四頁)。なお四七人と六組仲間は議定為取替証文をとり、四七人は宿方日雇方双方議定の写一冊を受取っている。

(50)「同右」七六一頁

(51)「同右」七二五頁。「駅肝録」(「前掲書」二九〇頁)

(52)「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七二五頁)。「日本財政経済史料」九卷五三二頁

(53)「御触書天保集成 下」(五五七九)四六〇頁。これに関連する六組等への申渡については「五街道取締書物類寄」

(「前掲書」七二五七頁)参照。

(54)「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七四〇一二頁)。「類集撰要」二十八。

(55)「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七四四、七六一一三頁)

(56)「同右」七三五七頁

(57)番組人宿については南和男「前掲書」二二六一二八頁参照

(58)「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七三四一五頁)

(59)「同右」七三三四頁

(60)「同右」七四一七頁

(61)「同右」七三九一四〇、七四七八頁

(62)南和男「前掲書」二二八、二二七頁

(63)「五街道取締書物類寄」(「前掲書」七六五七頁)

(64)「同右」七二七、七三七一九頁によると、文政五年日光道中下徳次良宿で祝儀錢をとり陸尺日雇直藏は敲の上江戸払、六組日雇請負三人は過料錢拾貫文宛に処せられ、文政一〇年に東海道赤坂宿で不法をした日雇は手鎖三〇五〇日、通日雇請負人は過料錢五貫文、日雇を同居させた通日雇請負人は過料錢三貫文となっている。中仙道追分宿の場合については児玉幸多「近世宿駅制度の研究 改訂版」二七八、二八二、二八九一九〇頁参照。尤も天保六年東海道品川宿では非分がないと申立っている(「品川区史」資料編二六七頁)。

又京都では文化一三年から文政八年にかけて一回にわたり諸向手廻り部屋と人宿三拾六軒組合から六組仲間が逆に酒代をとられている(「五街道取締書物類寄」前掲書七二九一二三頁)。

(65)「天保新政録」巻之二「十組上納金御免仲間組合御停止之事」(「日本経済大典」四五卷五一頁)

(66) 「大日本近世史料 諸問屋興調 二」三二二頁

(67) 「同右 二」二一六頁

(68) 「同右 八」三五八頁。『問屋沿革小誌』（『徳川時代商業叢書』三卷二七—三二頁）。国立国会図書館参考書誌部

「諸問屋名帳 細目四」（旧纂引継目録6）一〇三—一六頁。

(69) 「大日本近世史料 諸問屋再興調 一」二八—三三頁。なお九月五日にも同様の記載がある（「同右 一」五〇—五五頁）。

(70) 「同右 二」三二〇—三頁

(71) 国立国会図書館所蔵、なお「諸問屋名前帳 細目四」四〇—九頁に収録されている。なお柳溪河内金節編「麴街略誌稿下」（『鼠撲十種』二卷五五—五頁）に「江戸六組飛脚問屋

山之手組」の六人が記るされている。

(72) 史料館所蔵（日本実業史博物館旧蔵）

(73) 三井文庫所蔵

(74) 「六組飛脚問屋書留二」所収寛政元年五月仲間名を、「六組飛脚旧記」の天明九年正月仲間名で校合した。

(75) 嘉永六年四月の店別は、日本橋組家持（A）三人、家主

（B）一、店借（C）七、同居（D）一、京橋組A六、B一、

C四一、D五、芝口組A一、B一、C一五、太芝組A一〇、

B二、C三二、D四、神田組A一、B四、C二六、D一、山

之手組A五、B三、C二七、D三、合計A二六、B二二、C

一四七、D一八であり、万延元年閏三月は日本橋組A三、D

一、地借（E）六、京橋組A三、B一、C一九、D八、E二

江戸六組飛脚問屋仲間について（藤村）

一、芝口組A一、B一、C二二、D四、E二、太芝組A六、

C一七、D四、E一〇、神田組A一、B五、C六、D一、E

一五、山之手組A三、B四、C一〇、D三、E六、合計A一

七、B二二、C六四、D二二、E六〇である。

(76) 三井文庫所蔵

(77) 「飛脚問屋大津屋書類」

(78) 昭和四七年一月杉本富士夫氏撮影

(79) 圭室諦成「肥後の蠟」（地方史研究協議会編「日本産業史大系」8九州地方篇一三—一三頁）

(80) 「東京市中各種問屋・組合・中買人書上帳」（早稲田大学

図書館所蔵大隈文書）の内の「六組飛脚問屋」分による。

(81) 明治一四年四月一五日出版横山錦棚編輯「東京商人録」商

社肝煎之部一九、二〇、二三、三一頁（史料館所蔵日本実業史博物館旧蔵本）

(82) 松本四郎「幕末・維新期における都市と階級闘争」（『歴史

における国家権力と人民闘争』歴史学研究別冊六七—九頁）

(83) 明治一七年二月一日発行買集三平編輯「東京諸営業員録

一名買物手引」五九五頁（史料館所蔵日本実業史博物館旧蔵

本）

(84) 「徳川時代商業叢書」三卷三二二頁

後記 本稿の作成に当って史料館、国立国会図書館、東北大学附属図書館、一橋大学附属図書館、慶応義塾図書館、早稲田大学図

史料館研究紀要 第五号

書館、通信博物館、三井文庫には所蔵史料の利用を許可された。
豊田武、杉本富士夫夫妻、柴辻俊六、松本四郎、田中康雄の諸氏
に御世話になった。記して感謝したい。

